

2024 年度アカデミック・ポートフォリオ作成 ワークショップ開催報告

東田卓*, 金田忠裕*, 田村生弥*, 鯉坂誠之**, 馬本勉***,
山下哲****, 竹元仁美****, 加藤由香里****, 北野健一*****

A Report on the Workshop of Academic Portfolio in 2024

Suguru HIGASHIDA*, Tadahiro KANEDA*, Ikumi TAMURA*, Shigeyuki AJISAKA**,
Tsutomu UMAMOTO***, Satoshi YAMASHITA****, Hitomi TAKEMOTO*****, Yukari
KATO***** and Ken'ichi KITANO*****

要旨

大阪公立大学工業高等専門学校では、教育改善の一環として 2009 年よりティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催している。2012 年からはティーチング・ポートフォリオ作成者を対象としてアカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを同時に開催している。本稿では、2024 年度に開催した第 24 回並びに第 25 回アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップの概要について説明した後、ワークショップ参加者の感想と考察を報告する。

キーワード： アカデミック・ポートフォリオ，教育改善，統合，メンティー，メンター

1. はじめに

大阪公立大学工業高等専門学校（以下、本校と略す）は、教育改善の一環として、2009 年 1 月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ（以下、TP と略す）作成ワークショップ（以下、WS と略す）を開催した[1]。教育改善を中心に置く TP に対して、アカデミック・ポートフォリオ（以下、AP と略す）とは「教育、研究、サービス活動（社会貢献・管理運営等）の業績についての自己省察による記述部分およびその記述を裏付ける根拠資料の集合体であり、教員の最も重要な成果に関する情報をまとめた記録」である[2]。

2025 年 9 月 16 日 受理

- * 総合工学システム学科 エレクトロニクスコース
(Dept. of Technological Systems : Electronics Course)
- ** プロダクトデザインコース (Product Design Course)
- *** 県立広島大学 (Prefectural University of Hiroshima)
- **** 木更津高専 (National Institute of Technology, Kisarazu College)
- ***** 令和健康科学大学 (Reiwa Health Sciences University)
- ***** 東京科学大学 (Science Tokyo)
- ***** 一般科目系 (General Education)

2012 年 1 月 4～6 日に大学評価・学位授与機構小平本部で AP 作成 WS が開催された。このときの手法を踏襲して、AP 作成 WS を開催した。それ以降 AP 作成 WS は毎年開催され[3]、2024 年に本校で第 24 回及び第 25 回の AP 作成 WS を開催した。本稿では、その WS の実践並びに考察を報告する。なお AP についての詳細、特徴等については既報[3]ならびに書籍[2]を参照されたい。

2. アカデミック・ポートフォリオについて

本校の AP 作成 WS は事前に TP を執筆した人を対象に 3 日間の日程で AP を完成させる方法で行われる。AP は、教育・研究・サービスのそれぞれについてふりかえり記述するが、それだけでなく、これら三者の互いの連携・寄与について考察する「統合」の章があることが最大の特徴である。また、これまでの成果から最も自分が誇りに思うものを 3 つあげて記すことも AP の大きな特徴である（これは、教育 1 つ、研究 1 つ、サービス活動 1 つと決まっているわけではなく、教育を重要視する教員ならば教育から 3 つ選ぶ等、教員の活動スタイルにあわせることができる）。さらに、将来達成したい目標を 3 つ記す点も単純な「業績リスト」と大きく異なる点である。これらを十分に自己省察しながら記述していく。このワークショップもコロナ禍を経て、少しずつオンラインから対面に戻りつつある。今回は第 24 回のみ、1 件のオンライン

参加があった。

3. 作成ワークショップ

2024 年度に開催した AP 作成 WS の概要を表 1 に示す。参加した作成者（以下メンティー）と助言者（以下メンター）の人数は、表 1 の通りである。日程は、WS の第 24 回が 2024 年 9 月 10 日～12 日、第 25 回が 2024 年 12 月 25 日～27 日である。なお、どちらも TP 作成 WS と同時開催で実施した。内容はオリエンテーションの後、AP チャートを作成し、メンターと数回に及ぶ個人面談（メンタリング）を交えながら原稿を作成し、その間、メンターはメンターミーティングを開き、メンタリングの進め方の報告と検討を行う。簡単なスケジュールを表 2 に示す。近年と 2019 年度の特徴は学内のメンティーよりも学外のメンティーの方が多く点である。一方、メンターを行う教員が多くなっており、本稿でもメンターの感想が多く記録されている。

第 24 回のスーパーバイザーは令和健康大学の竹元仁美氏と北野健一氏に、第 25 回のスーパーバイザーは東京科学大学の加藤由香里氏にご担当いただいた。なお本校の WS は、2013 年にティーチング・ポートフォリオ・ネットワークが公開した TP ワークショップ基準を満たしている。

表 1 2024 年度に開催した AP 作成 WS の概要

	開催時期	メンティー	メンター
第 24 回	2024 年 9 月 10 日～12 日	2 名 (学外 1 名)	2 名 (学外 1 名)
第 25 回	2024 年 12 月 25 日～27 日	4 名 (学外 4 名)	4 名 (学外 2 名)

表 2 AP 作成 WS のおもなスケジュール

	第 1 日	第 2 日	第 3 日
午前		個人メンタリング ② AP 作成作業	個人メンタリング ④ AP 作成作業
午後	オリエンテーション AP チャート作成 個人メンタリング ① AP 作成作業	個人メンタリング ③ AP 作成作業	AP 作成作業 プレゼン準備 AP プレゼンテーション 修了式
夜間	夕食会：意見交換会 AP 作成作業	AP 作成作業	修了を祝う会

4. AP 作成の実際

4.1 メンティーとして

AP 作成 WS はどんな栄養剤よりもよく効く（池田光香）

私がアカデミック・ポートフォリオ（以下 AP と略記）を作成した目的は二つある。一番の目的は、私が理想としている大学教員としての姿に立ち戻るためである。本務校での日常業務に忙殺される中で、「自分は何のために大学教員をやっているのか？」と頻繁に考えるようになり、「もしかすると、自分を見失っているのではないか？」と考えるようになっていたからである。もう一つは、大学教員としての私のアイデンティティを学生に知ってもらいたかったからである。思い返せば、いつも授業をしている学生に対して私が何かを詳しく話したことがなかった。学生目線で自分を振り返ると、「管理栄養士になるための食品学と食品衛生学を教えている先生」程度でしか認知されていないように思えた。学生目線で授業をしている教員をみたときに、「大学教員としてどんな理念をもっており、どんな方針に基づいて教育・研究・社会貢献活動を行っているのか？」が不明瞭な状態では、学生は教員に興味を持ってくれないと思う。授業を退屈そうに聴いている学生の顔を思い出して、「当然そうなるよな」と申し訳ない気持ちになるのである。

AP 作成では最初に TP の更新と凝縮版の作成があったが、とても苦労した。2 年半前に TP を作成した後、日常的な教育活動の振り返りが十分にできていなかったこと、表れだと強く感じた。TP の更新はとても苦労したが、AP 作成にあたって TP の更新ができたのは大変有り難かった。

ワークショップ期間中は頭の中がごちゃごちゃとしていて、初稿、第 2 稿、第 2.5 稿は、今見返しても当時の自分の頭の中の様子がよく分かる。しかし、第 3 稿へ向けて AP を作成していると、突然その時はおとずれる。表現が難しいが、さっきまで霧の中を彷徨っていたのに、急に霧が晴れ見通しが良い状態になるのである。TP 作成のときも不思議であったが、AP 作成の時も同じ現象が起こった。

TP 作成ワークショップに参加したときと同様のことが言えるが、ワークショップ参加後は、とにかく元気になる。本ワークショップが年末開催だったので、年末年始の休み明けからとても良いスタートをきることができた。本ワークショップ運営の皆様、そして混乱した私の頭の中を根気よく整理してくださり一緒に伴走してくださった東田先生に心から深く感謝申し上げます。

AP を執筆して（岩瀬貴子）

私が所属する大学ではスーパーバイザーを引き受けてくださった東京大学栗田佳代子先生とのご縁のもとに、2023 年度より学内 FD として、TPWS を開催している。私は 2023 年度に栗田先生にメンターをご担当いただき、TP を執筆した。この頃私は、学生部長と学科長を兼任し

ており栗田先生に相談後、管理者の視点を重視した TP を作成することになった。これまで管理者の立場で他者に相談することがなかったこともあり、メンタリングは 2 時間を超えることもあったが、メンタリングを重ねるごとに、思考が整理され、自分自身を乗り越え、新たなミッションへと導かれるように執筆したのを覚えている。

2024 年度はメンターを経験させていただき、その際、栗田先生から「次は AP ね」と微笑まれ、栗田先生には「はい」以外の返事がない私は、2024 年 12 月 25 日から始まる（クリスマスだというのに夫を長崎に置いて）大阪高専 TPWS にて AP 執筆に臨んだ。この時、2 名の所属大学の教員仲間と共に参加できたことはとても心強く、「凄いわ～メンターって」と目を輝かせながら語り合い、執筆できたことも貴重な思い出である。

AP のメンターは木更津高専山下哲先生にお世話になった。山下先生は一見強面で、初回メンタリングでは（お互い）、苦笑いしながら始まったが、メンター経験豊かな山下先生の導きにより、理念と理念に基づく思考の整理が始まった。初日の夜は思考が拡散し浅眠状態で 2 日目を迎えた。山下先生に理念は AP・TP として、教員としての理念だけでなく、私自身の目指す人間像としての理念で良いとアドバイスを受け、私自身が目指す人間像を考えた。すると悩むことなく一文が浮かび、すっと落ち着いた自分がいた。山下先生から「この部分とこの部分なんか繋がってませんか」といった指摘を受けたような.. その瞬間光が頭を貫いた感覚があり思わずその場で絶叫。そのあとは高揚感に浸り 1 人で語り続ける私。山下先生は「え？」と目が点だった。大騒ぎをし、周りの皆様にたいへんご心配をおかけしたのも楽しい思い出。この 2 日目 2024 年 12 月 26 日は私にとっての「目覚めの日」。大阪 TPWS に参加したのも、山下先生との出会いも、これまでの私の人生もすべて必然であることを実感した。3 日間というとても短い期間であったが同じ部屋で共に執筆した他大学の新しい仲間ができたのも、全国から参加者が集う大阪高専 TPWS の強みだ。この時執筆した AP は研究室の PC デスクトップに置いてあり、毎週月曜日には必ず読み自身を奮い立たせるものである。今年、長期目標を達成すべくひとつ階段を上った。私のような貴重な体験を一人でも多く増えることを願い、TPWS を継続し、地元長崎の先生方を始め多くの人を TP で元気にしていきたいと考えている。

AP を執筆して(木内敦詞)

2022 年 9 月の TPWS で TP を作成した 2 年後の私は、今回は AP 作成だ！と意気込んでいた。完成したスタートアップシートを 8 月下旬に北野健一先生へメールで提出を済ませ、2 週間後の WS に向けて準備万端のやり遂げた感に浸って祝杯をあげていた。すると間髪入れずに

北野先生から「APWS の課題はもう一つあるのですよ」の囁きメールがプレゼントのように届いた。私は、TP の更新・短縮版の作成をすっかり忘れていたのだ。それから 2 日かけて 2 つ目の課題に取り組んだことを、妙に鮮明に覚えている。

私が思うに、この TPWS や APWS の参加者にとってのいいところは、普段の教員生活から「学生生活」に戻ることができることではないだろうか。事前課題のスタートアップシートは久しぶりに宿題に取り組んでいるような気がしたし、メンターの金田忠裕先生は家庭教師のような雰囲気に対応してくださった。他のみなさんも同じだと思うが、普段は自分のためだけに多くの時間をまとめてとることはできない生活である。一方この WS の 3 日間は自分の普段の活動を自分のためだけに振り返ったりそれを言語化したりの作業がみっちりあるし、自身の話をメンターの金田先生に親身になって聞いてもらったりした。そのおかげで、これまで気づけなかった自分の考えを掘り起こしてもらい、多くの気づきがあった。WS 3 日間は連日確かにクタクタにはなったが、最終稿の AP を提出した後は、TP 作成の時よりさらに大きな、何ともいえない充実感を得たのを覚えている。

大学で体育教員をしている私は今、安心安全のなかで他者との協働を通して学修成果を保証する授業をめざしている。大阪公立大高専の先生方が長年積み上げてこられた WS プログラムや雰囲気、そしてメンター制度やスーパーバイザーを置く WS 運営は、まさにそのモデルともいえるように感じる。

振り返ると、TPWS も APWS も、私はオンラインでの受講であった。私の研究指導する大学院生は遠方在住の大学教員が多く、普段の打合せは基本的にオンラインで行っていることも影響してか、オンラインの WS に違和感はなく、むしろ普段通り快適に課題に取り組めた。対面受講とオンライン受講の併用は機材準備やカメラマン配置等の必要性から運営負担が大きいとは思いますが、TP/AP 普及には必要な要素のように感じる。

TP も AP もこのワークショップでご指導いただきながら作成できたので、今後はメンターとして恩返しできるよう、研鑽を積んでいきたい。人の話を聞かずに自分の話をしてしまう性格の私がメンターの役割を果たせるのかは甚だ疑問であるが、ぜひ挑戦させていただきたい。どうかよろしく願いいたします。

AP を作成して(古山千佳子)

私は 2015 年に勤務先の県立広島大学で TP を作成し、2022 年の更新を経て、この度 2024 年 12 月に大阪公立大学高専で AP を作成した。作業療法教育に携わって約 20 年間、教育理念について考えたことのなかった私にとって TP 作成の 3 日間は苦しいものであった。しかし、

この苦しみの中から作業療法教育を続ける理由が見えてきた。AP を作成しようと決めた理由は、教育に限らず研究や地域貢献などの様々な実践を振り返り、これらの関係性を見直したいと考えたからである。

AP の作成は、私の教育、研究、サービス活動とそれらの繋がりを可視化することに役立ち、作業療法士としての実践が基盤となって教育・研究・サービスが繋がっていることを確認させてくれた。また、今回のワークショップでは、ポートフォリオはメンティとメンターやその他のスタッフとの協働によって創られることを強く感じた。メンターは、背景の異なる私の話を真剣に聴き、理解しようと努力してくれた。教育・研究・サービスの繋がりが見えず混乱する私に対し、考えを否定したり、誘導することなく、私自身が気づくよう道標となってくれた。そして、スーパーバイザーをはじめ、他のスタッフはこの状況を温かく見守ってくれた。さらに、今回初めて自分の職場以外の環境で様々なメンティと共に WS に参加した。メンティの中には、いかに生徒の声を聴くかを真剣に考え、悩み、挑戦している新人教員や将来は大学のトップに就き、理想の教育・研究・サービスを実現するという大きな目標を語るベテラン教員等がいた。参加者全員から多くの刺激を受けたと同時に、自分の実践を振り返り、それらを互いに語り合い、共有することの大切さを実感した。

AP を作成する中で、退職までの残り 8 年間に何をしたいか、或いは何を必要とする必要があるかを考えることができた。この経験を基に、日々の教育、研究、地域貢献に取り組んでいきたい。

AP 作成について (田村生弥)

多層実践の統合と未来への指針

私は 2020 年に TP を作成していたが、AP 作成は今回が初めてだった。この AP の作成は、私にとって自己の教員活動を統合的に振り返り、将来の方向性を見定める貴重な機会となった。一般的な TP が教育活動に焦点を当てるのに対し、AP は教育・研究・サービス活動を統合した点に大きな違いがあった。TP は、教育実践を詳細に記録し、教育者としての実践や目標を示すことを主眼としていた。しかし、AP では教育活動だけにとどまらない、研究活動を通じて専門性を高め、サービス活動を通じて学生支援や地域貢献を行うことも含めたより統合的なものとなっている。

TP の時と同じように今回も何を目的に AP を作成するのかを記述するのに一番時間を要した。メンターの先生はこちらの話をよく聞いてくださり、内にあるものを引き出してくださる方で作成の中でとてもお世話になった。4 年前と社会の状況や自身の考えなども変化しており、自分が何を重視し、何が必要と考えているのかを明確にすることが出来た。また、教育・研究・サービス活動を統合していくのも時間を要した。コロナ禍の TP 作成時と異

なり、今回は作成者が一つの部屋で作業しており、時々言葉をかけあいながら作業することができ、なんとか「複雑なエコシステムを多層的・多面的に捉え、分析し、理解する」という 3 つを統合する理念を設定することが出来た。また、これらの経験を統合的に振り返ることで、各活動が独立したものではなく、互いに影響し合い、教員としての成長を促す羅針盤となっていることを実感した。このポートフォリオ作成を通して、私が今後何を核として働くのかというビジョンが明確になった。この作業を通じて、社会の複雑さや不条理な側面を乗り越え、自分らしい役割を見つけるための指針を得ることができた。

AP 作成 WS の贅沢な環境で自己を見つめて (登喜和江)

私は、看護基礎教育において初年度生が「看護とは何か」を学ぶコア科目である『看護学概論』を 15 年担当している。初年度生への授業は、学生の傾向を掴む前に始まるため、毎年微調整をしながらの授業計画である。そこで、この授業展開を中心に自身の教育研究活動を見直したいとの思いから、2024 年 2 月にオンラインで行われた TPWS に参加し、TP を作成した。その体験は、自身の教育のコアとなる部分を改めて見つめ直すことができ、これまでの授業工夫について「このまま継続できそうだと」感触を得る機会となった。その際に、次のステップとして、自身の大学教員としての活動を俯瞰する機会でもある AP 作成の必要性も感じていた。2024 年 12 月に AP 作成の WS が対面で開催されることを知り、大学教員としての教育・研究活動を 1 年残すだけだからこそ AP 作成に取り組む必要があるのではないかと思い、参加を決めた。

対面での AP 作成は、参加者にも恵まれ楽しいの一言に尽きる 3 日間であった。WS 参加者もさることながら、メンターの方々も異なる教育機関から集まり、このためだけの時間を作って頂き、なんて贅沢な時間を過ごせるのだろうと感謝と感激の日々であった。自身に向き合う時間とメンターがまるでカウンセリングのように、これまでの活動について、興味・関心を示しながら問うてくれることで、自身の教育活動・研究活動・サービス活動の 1 つ 1 つに光を当て、学部長として何を考えて学部運営をしてきたのか？、また研究科長として何を大事にしているのか？、大学運営にどういったスタンスで関わってきたのか？、研究者として何を成そうとしているのか？、そして教員生活最後の 1 年となる次年度に向けて自身は何をしたいのか？など様々なことを心の中を覗き込むような時間を過ごすことができた。そこからの気づきや得たものは、恵まれた人間関係の中で大学教員としての仕事ができたと「だれか(患者)のために」という看護への思いを中核として「教育」や「研究」さらには「サービス」を展開させていたことにも気づくこ

とができた。WS 最終のプレゼンテーションでは、伴走者としてのこれまでの自身の在り方と次の世代に「看護マインド」のバトンを渡すイラストを作成し、自身の3つの活動を説明した。この原稿を執筆するにあたり、カバーページとなったイラストを取り出して見て、一人ではここに辿り着くことができなかつたと改めて感じ、メンターの方々やWS参加者に感謝の思いが湧いてきた次第である。

4.2 メンターとして

メンタリングの魅力（鯉坂誠之）

今回、APのメンターをさせていただいた。作業療法系のベテランの先生がメンティーだったため、お書きになりたいことがたくさんあるだろうな、と予想していた。事前課題のスタートアップ作成も5時間かけて書かれたことが記されており、内容もきちんと書かれていた。そのため、メンターとしては相互に会話をする中で情報を整理していき、ご自身のコアを発見されるための伴走をしていく…というメンタリングの基本に沿って進めていけばよいと考えていた。まずは、初日にお会いして、APチャートを見させていただきながら、メンタリングを進めていった。APチャートで挙げられている付箋紙のまとまりを読み解いていくと、ご自身の興味関心は、大きく3つくらいに分類されていることが見えてきた。話をしているうちに優先順位があることが分かってきたため、いったん、その優先順位にそって教育⇄研究、研究⇄社会貢献、社会貢献⇄教育の相互の関係について質問してみると、興味関心の優先順位が高いものよりも、最終的に実施していきたいと考えられている3番目のまとまりが実は重要であることが見えてきた。どうやら、ご自身が優先順位を高く考えられていた内容は、すべてに関係してきているものが、実は最近ではご自身の興味関心が薄れてきていることが分かってきた。メンタリングをしているうちに、そのことに気づかれたようで、とても嬉しそうな顔をしていた。メンターとしては、苦しむのはこれからですよ、と思っていたが私も笑顔で良かったですね、と返しておいた。こうして初日、二日目とメンタリングを進めて行き、第1稿、第1.5稿、第2稿…とご自身の考えを文章化していく作業では、なるべく書きたいことを全て洗い出してもらった。最も苦しまれていたのはカバーページとしてご自身のコアを図として描くところだったようだが、出来上がった図を見る限り、かなりスッキリされたのではないかと思う。私もメンタリングをしていてとても楽しい時間を過ごすことができた。ありがとうございました。

初めてのAPメンターを経験して（馬本勉）

2024年12月、大阪公立大学工業高等専門学校でのワークショップで初めてのメンター、それも初めてのAPメンターを務めるという得難い経験をさせていただいた。私自身は2016年8月に県立広島大学でTPを作成し、翌年9月のTP更新を経て、2017年12月にAPを作成した（当時の大阪府大高専にて）。2022年8月には2度目のTP更新を行っている。メンターとしては、いずれも県立広島大学でのTP作成ワークショップにて2019年、2021年、2024年の3回経験しているが、学外で、しかもAPのメンターは初めてであり、非常に緊張して臨んだことを覚えている。初日の顔合わせで旧知の方々と話すうちに、緊張感は徐々に和らいでいったが、やはりワークショップは「和やかな中での真剣勝負」であることを強く感じた3日間であった。

担当したメンティは、教育・研究・サービスのいずれにおいても実績を重ねてこられたベテランの方で、全てを包含するご自身のコアを掴もうと、真剣なリフレクションを重ねられた。メンター経験を経るたびに、私の言葉数は減り、メンティの語りに多くの時間を割けるようになった（と思う）が、今回私は、先輩から多くを聞き出そうとする後輩のようであったかもしれない。決して経験豊富ではないが、私にとってメンタリングの醍醐味は、メンティの「心の雪解け」に立ち会えることだ。初回メンタリングのラポール作りで築く相互の打ち解けを超えるのは、メンティが自身の振り返りに喜びを見出した瞬間であろう。その多くは、表情のほころびとなって伝わってくる。これが嬉しい。名実ともに駆け抜け、充実したAPを書き上げたメンティには、心からの感謝と祝意を伝えたい。

メンターミーティングでの収穫も非常に大きい。ミーティングを重ねるごとに、和やかさの中にも、他流試合のような真剣味を経験した。つまり、自身のまだまだ未熟なメンターぶりに気付かされた。個性的なベテランメンターとスーパーバイザーの語りに垣間見える、問いや投げかけのノウハウの数々は、極めて刺激的であった。これらは2025年3月に広島で開催されたTP研究会総会のトークセッションや、8月のワークショップ（県立広島大学）でのメンター経験に大きなプラスとなった。

そして私は再び、2025年9月のワークショップで大阪へと向かう。ここでの新しい出会いを自身のさらなる成長に繋げていきたい。

APのメンターを担当して（金田忠裕）

担当のメンティーの専門は、大学体育スポーツである。作成されたAPの序論に記載されている「大学教員として何をどのように行動してきたのかを振り返り、その根っこにある自身の生き方に自覚的になる…」がどのように展開されてきたかを考え、ワークショップを振り返

りたい。

TP を既に作成されていることから、まずは「自身のこれまで」を考えてもらうために「この分野に入るきっかけとなったこと」「影響を受けた友人や先生」について詳細にお聞きし、現在に至るまでの分岐点などについても考えてもらうことが最優先事項となる。1980 年代にナラティブ・セラピーを開発されたマイケルホワイト氏の言葉を借りれば、「外在化する会話」一問題を客体化することで、心の中にあったことが言葉として文章化されることになる。この点はスタートアップシートや AP チャートなどに記載されていないことが多く、メンターとの会話から思い出されることも多い。

この世界に入るきっかけとなった高校 3 年生の夏のこと、受験を控えたなかで、これだと思えるものを見つけたときの感動は想像も絶するものであったと思われる。何十年も前のことを今見てきたかのように生き生きと話される様子に深い感動を覚えたものであった。

次の分岐点は、30 代半ばで生理学研究から授業研究へのシフトであった。大学設置基準大綱化による大学体育の存続への危機感、そして授業実践研究を通しての学位取得につながったことであった。私自身も大学院の時と就職してからの専門分野を変更したことで葛藤があっただけに、どれほど悩まれながら過ごしたであろうか。また学位取得に繋がったときの喜びは計り知れないと考えられる。

次の分岐点は現在の職場に異動してからのことであった。これまでの成果が形として現れてきたとって過言ではない。そして、現在の大学で、実践研究できる力を持つ学生を育てる博士課程を担当する「大学体育スポーツ学」とでもいうべき研究領域、すなわち自分の世界観を構築されている。授業実践の改善が研究へと繋がり、サービス活動である大学体育スポーツに関する FD と学術の発展を担う全国大学体育連合の活動へも直結する。

このように 3 日間を通じて、教育-研究-サービスの相互循環と統合がなされていることを確認され、AP 作成の一番大事なところである「統合」を実感されたと考えている。

メンターとして (東田卓)

自分自身の AP を 2011 年に執筆して 14 年が経ち、AP のメンターは今回で 14 回目となった。AP は教育・研究・サービスの 3 点を振り返り、その核 (コア) を見いだしつつ、自身の大学人としての立ち位置を見出すことに意義がある。オンラインの学会やオンラインのシンポジウムは旅費も掛からず、移動の必要もないことから、気軽に参加できるメリットが大きい。しかし、AP の WS に関して

はメリットばかりでは無い。メンターとして全力で対応し、お話も傾聴するのではあるが、どうしても互いに見えない距離を感じる事が多いし、パソコンディスプレイの画面越しで本当にラポールが形成できているのかわかりにくいところもある。対面開催の場合、最初はぎこちなく個人メンタリングを始めても、初日に意見交換会をし、飲食をしながらメンター・メンティー、メンティー同士で職場の雰囲気話しながら和気藹々として、膝を突き合わせながら心を和ませていく。執筆の合間にお茶を飲みながら他のメンティーとのお話をして、TP の考え方の視野を広げるなど、対面 WS ならではの仕掛けがたくさん用意されている。今回はコロナ禍を経てようやく対面でのメンタリングを再開することができた。メンターの最初の頃はメンティーにどのように声掛けをするか、会話の切り出し方など悩みも多かったが、メンターミーティングでさまざまな学びがあった。今ではメンティーとの最初のメンタリングでの座る位置、声かけの仕方、相槌の打ち方、共感の仕方など自然にできる様になってきた。これら対面独自の距離感は、オンラインでは少し難しい事柄である。メンタリングではどの様にこれらの教育研究活動をしてきたかを質問したり、共感するとともに、メンティーの思いを深掘りしたり、ご家族や恩師とのお話を伺ったりした。メンター側として、時として「アカデミックポートフォリオ」の教科書[2]や過去の APWS の紀要[3]などを読んで、これまでのさまざまなケースを振り返りつつ、メンティーのお気持ちを汲み取ることもあった。

今回、2024 年の冬に 1 名の方の AP メンターを対面で担当させていただいた。メンタリングではスタートアップシートの中で、少し自信を無くしておられる様な書きぶりや、AP 執筆で教育研究に活性化を求めたいという内容であった。傾聴するうちに、ご本人の考えが徐々にまとまり、教育、研究、サービス活動が有機的に結びついてきて、最終的にご自身のコアを発見された。これが AP の醍醐味であり、今回も一緒に伴走できてよかったと感じた。完成後はとても自信に満ち溢れた笑顔が印象的であった。このワークショップを終え、壁を乗り越えて、新しい教育研究者としてリフレッシュして大学へ戻っていただければと思う。メンタリングは正に一期一会、メンターがどう話すかによってポートフォリオの完成の形は違ってもかもしれないが、TP も AP もポートフォリオの最終はご本人のものであり、我々は常に伴走者としての意識は持たなければいけないと思いつつも、「こうすればよかったか？」などとの自責の念も無いことは無いと思いつている。この後、何年続けられるかは不明であるが、もう少しメンターとして修行をしつつ、メンティーとの伴走を楽しみたい。

メンターはメンティに寄り添わないと．．．（山下哲）

私は大阪公立大学高専 TP/AP 作成 WS のメンターとして 12 年間参加させていただいているが、2024 年度冬は久しぶりの AP メンターを担当した。担当したメンティは、教員経験が豊富でトップになるという大義を抱いた素晴らしく魅力に溢れた教員だった。スタートアップシートや TP 縮小版もよく纏められていたので、AP の肝である教育・研究・サポートの関係性とそれらの中軸となる理念の絞り出しを一緒に探すことにした。経験豊富な教員がメンティの場合、メンターはメンティの豊富な経験の中から理念に関連のある部分をピックアップして整理し、AP 作成の方向性を示唆しなければならないのだが、私はそのような指先案内人の役目が最大の苦手だった。そこで、メンティの指先案内人となることを諦め、メンティと教育談義をしながら、メンティ自身で中軸となる理念に自ら気づいてもらうことを願った。すると、2 日目の朝の談義で、何とメンティに天啓が降臨し、メンティ自身が大きな衝撃を受けられ、思わぬ事態が生じて私の願いが叶った。メンティはこの衝撃を契機に、着々と AP 作成を進め、経験豊富なメンティにぴったりな中軸となる理念を自然と見つけていった。

メンティと教育談義ができたことは、メンターである私自身の教育理念をメンティにも理解してもらいながら、メンティ自身が軸となる理念を思いつくきっかけを与えてくれた。メンターはメンティに寄り添うのが常識ではあるが、お互いの経験を語り合う「教育談義」がメンティの気づきを誘発できることを学べた。今回、私の願いが叶ったのは、メンティの豊富な経験による処が大きく、どんなメンティに対してもうまくいくわけではない。メンティの特長を鑑みて、メンティとどのように相対するかを決めるべきだと思う。その結果、メンティに寄り添うことに決まればその方針で進めて行けば良いのではないだろうか。最後に、このように特別な試みを行える機会を与えていただいた大阪公立大学高専スタッフに感謝の意を表したい。

4.3 スーパーバイザーとして

AP スーパーバイザーを担当して（加藤由香里）

2024 年 12 月 25 日（水）-27（金）の 2 日間、大阪公立大学高専で開催された第 25 回 AP 作成 WS にスーパーバイザー（以下 SV）として参加した。TP の SV である北野健一先生と協力しながら、ベテランの大阪公立大学メンターチーム（東田先生、稗田先生、土井先生、鯉坂先生、谷野先生）に 4 名の外部メンター（山川先生、長水先生、山下先生、馬本先生）が加わってくださり、2 つのメンターチームで活動を行った。どのメンターの先生

も経験が豊富で、スーパーバイザーが必要ないくらいの充実したスタッフで対応できたと思う。また、メンティー 1 名にメンター 1 名という体制であり、メンティーに向き合う時間を十分に取ることができたと思った。

今回、忘れられないのは、メンティーのアイディアがなかなかまとまらず、TP を作成する手がかりを探っている時に、自然発生的にメンターの連携リレーが生まれ、いろいろな対応策を次々と繰出すことができたことである。例えば、「メンティーにどうアプローチしたらいいのか、待つべきか、TP 作成案を示すべきなのか」など、正解はすぐにわかるわけではなく、限られた時間は経過していき、メンティー以上に責任感の強いメンターが困ってしまうこともある。通常は、個別相談の指導（メンタリング）をメンターチームに持ち帰り、議論し、それをまた個別相談で試してみるというサイクルを回していく。今回は、経験豊富なメンターが集まったことで、「側で黙って見ていられず」、「こんなものか？」とか「こうではないのか？」というような多彩な支援がメンティーに向けて自然発生的に行われていった。メンティーから見れば、個別相談を側で見守っていたメンターが代わる代わる励ましにきて、さらに、アイディアを惜しみなく与えてくれる環境だったのではないかと思う。これは、大阪公立大学高専ならではの手厚い支援体制ではないかと思う。また私自身も、メンターとメンティーの硬直した関係を解きほぐす一つの解決方法を発見したように思った。

毎回、多くの TP・AP 関係者が寝屋川に集まって、短い期間ではあるが、メンティーとメンターの双方にとって、教育者としての「今まで」と「これから」を真剣に考える貴重な時間になっていると思う。大変お世話になりました。

あなたは「朝派」？それとも「夜派」？（北野健一）

私は、本校における第 1 回 TP 作成 WS（2009 年 1 月）からずっと運営スタッフとして WS の開催に携わらせていただいているが、諸事情で運営スタッフとは別にスーパーバイザーも兼任しなければならないことがある。2024 年度は夏（第 31 回）、冬（第 32 回）ともに SV も兼務させていただくこととなった。

SV は、担当するメンティー（通常数名）の原稿を読み込み、メンターミーティングで、担当メンターとともにポートフォリオの進捗状況を確認し、必要があれば、メンターに助言する役割であるが、今回はメンターがベテラン揃いで、その面では特に不安なく進んだので、少し一般的な事を書こうと思う。

本校のワークショップは、1 日目、2 日目とも、23 時を原稿の締め切りとしており、その時点の原稿を Google Classroom 経由で提出する。担当メンターと SV は、その提出された原稿を翌朝までに読み込み、翌朝のメンター

ミーティングを経て、個人メンタリングでメンティーに気になる点を伝える。メンターは、担当しているメンティー 1～2 名分の原稿を読むだけで良いのだが、SV は担当しているメンティー（通常数名）の原稿をすべて読み込まなければならない。

私は 50 代後半になるが、いまだに朝は強くはない。そこで、SV になった時は、できるだけ深夜のうちに原稿を読んで、睡魔の限界が来たら、一旦寝て、朝早く起きて再度読むようにしている。SV によっては、夜は読まずに、まず寝て早朝（と言っても午前 3 時とかなので、深夜かもしれない）に起きて原稿を読む方もおられるようである。夜読む派にしても、朝読む派にしても、どちらにしても睡眠時間を削っていることには変わりがないのだが、メンティーの皆さんの教育に対する思いや実践を人よりも多く読ませていただいているので、自分の睡眠時間と引き換えても（今のところはまだ）苦にはならない。皆さんも、ぜひポートフォリオを書いていただき、ポートフォリオを書いた後は、メンター経験を積んで、最終的には SV になっていただくことを望んでいる。

APWS のスーパーバイザーとしての経験を振り返る

（竹元仁美）

第 24 回 APWS における SV 経験を振り返り、改めて SV の役割について考察したい。

今回の担当チームは、TP メンティ 3 名と AP メンティ 1 名であった。唯一の AP メンティは本 APWS に参加された時点で、いくつか異なる領域での経験を持つ若手教育者・研究者であった。奇しくも、その担当メンターは私が AP 作成時にメンターをさせて頂いた方で、人柄、メンターとしての適性、能力についても確信を持っており、SV である私にも安心感・安定感を与えて頂いたのは僥倖であった。オリジナリティ溢れる AP を書かれた経験をもつ、穏やかで傾聴スキルの高いメンターである。その期待を上回り、個人ミーティングを重ねるごとにメンティとの信頼関係が着実に構築されていき、その AP メンティにしか書けない唯一無二の豊かな将来を予感させる AP が誕生した。

AP を作成する過程において、教育・研究・サービス（社会貢献・学内運営）の観点から、今まで歩んできた自身の軌跡を振り返り、その軌跡に影響を与えた人や経験に思いを寄せ、源流に立ち返る。さらに原点から現在までの人生を見つめ直すことで、曇りのない視点から現在を捉え直し、将来を展望することが可能となる。しかし、人間誰もがそれぞれの葛藤や苦悩を抱えているが、表層からうかがいしることはできないし、それに向き合う過程は容易いものでもない。その AP メンターの「共/伴にある」姿勢と行動が、AP メンティが当時抱え

てていた葛藤に向き合い、意味づけを捉え直す大きな推進力になったと考えている。

SV として私が果たした役割とえば、メンターとメンティの関係性の構築具合を静かに温かく見守り、メンターの心身の疲労度を推し量って、「共/伴にある」姿勢を支えることくらいであった。WS を無事に着地させるためには、メンティとメンターの力を信じることとこのようにいくつもの「共/伴にある」関係の形成発展過程を信じて見守ることが必要とされるように思う。

5. おわりに

今回は、5 名のメンティーと 5 名のメンターならびに 3 名の SV の感想及び考察を収録した。

2020 年はコロナ禍に見舞われ大変な年となった。2020 年 9 月の WS は中止となったがその後、徐々に対面での参加が増え、第 24 回 25 回ではオンライン参加は 1 件だけであった。オンラインと対面での差異やメリット・デメリットの意見も述べられている。SV とメンターによるメンターミーティングの内容に触れた報告もあり、これまで本校で長期に渡り継承してきた「メンターミーティングの方法」について、これから新しく開催される WS 主催者の参考になると思う。また、メンターや SV の立場として、ポートフォリオの精読する時間帯についての感想もあった。

AP 作成 WS も第 25 回を数え、本紀要にも多くの報告がなされてきた。本校では教員の採用時並びに昇進時にはポートフォリオ等の提出などもあり、執筆者は着実に増えつつある。またメンティーのみならず、メンターの経験者が増えつつある。今後は開催報告にまとめられている貴重な「感想」を体系的に整理していくことも重要であろう。

この原稿がこれから AP を作成するメンティーや、メンター、SV としての役割を担う方々の参考になれば幸いである。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 24K06117 の助成を受けたものです。今回拙著にご寄稿いただいた活水女子大学の池田光壺先生、活水女子大学の岩瀬貴子先生、筑波大学の木内敦詞先生、県立広島大学の古山千佳子先生、千里金蘭大学の登喜和江先生に感謝致します。

参考文献

- [1] 北野ほか：日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して、大阪府立高専研究紀要、第 43 巻、pp.63-70(2009)。
- [2] ピーター・セルディン、J. エリザベス・ミラー著、大学評

価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳, アカデミック・ポートフォリオ, 玉川大学出版部(2009).

[3] 金田ほか, 日本初単一教育機関内アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して, 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要研究紀要, 第 46 巻, pp. 71-76(2012). 東田ほか, 2017 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告, 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要, 第 52 巻, pp. 69-76(2018). 鯨坂ほか, 2018 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告, 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要, 第 53 巻, pp. 47-54(2019). 東田ほか, 2019 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告, 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要, 第 54 巻, pp. 25-30(2020). 鯨坂ほか, 2020 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告, 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要, 第 55 巻, pp. 31-38(2022). 北野ほか, 2021 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告, 大阪公立大学工業高等専門学校研究紀要, 第 56 巻, pp. 11-16(2023). 北野ほか, 2022 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告, 大阪公立大学工業高等専門学校研究紀要, 第 57 巻, pp. 35-42(2024). 金田ほか, 2023 年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告, 大阪公立大学工業高等専門学校研究紀要, 第 57 巻, pp. 33-38(2025).